岸和田のいまむかし

和泉葛城山頂上の展望台から見渡せる、大阪湾と岸和田のまちなみ。そこには、山々の緑とさまざまな古墳、大小の池、田畑、城や港、そして鉄道に道路など、古から現在に至る人々の営みが形となって存在しています。大正11年(1922)11月に、岸和田の地が市となって100年。岸和田市は誇るべき歴史・遺産とともにさらなる未来を育んでいきます。

岸和田市の100年は、誇るべき歴史の上に

わがまちヒストリー

高僧・行基による久米田池築造、戦国時代の英傑たちによる激しい攻防、歴代城主による城下町の整備、寺田財閥の躍進による近代化……岸和田の魅力的なその歴史が、市制施行100周年の礎に！

久米田池の誕生

神於山から流れる川をせき止めてため池に

古くから神体山として崇拝されていた神於山から流れる轟川(春木川)の水をせき止め、堤防を築いて水を集めたのが久米田池工事のはじまりです。現在の久米田池の底には、かつて川が流れていた痕跡が確認されています。

機械などはもちろんない時代。行基の開削指導によって進められた灌漑築造は、鍬(すき)や鋤(くわ)での手掘り作業による大変なものだった

奈良時代に行基が築いた大規模インフラ工事

久米田池がある八木郷一帯は、かつて干ばつに悩まされていました。民の苦難を軽減するため、聖武天皇がのちに「奈良の大仏」造立の責任者となる僧・行基に灌漑用のため池築造を命じ、造られたとされています。

行基は、布教活動を行いながら各地でため池、用水路、橋、道路といったインフラ整備に尽力していました。岸和田の地においても地元の農民たちを率いて開削を進め、神亀2年(725)から天平10年(738)まで14年もの歳月をかけて「久米田池」を完成させます。

また行基は、池のすぐそばに、久米田池を維持管理する施設として「隆池院(久米田寺)」を建立します。この久米田寺は久米田池とともに灌漑事業の歴史を今に伝える場所で、10月祭礼の「行基参り」では、行基への感謝の意を込めて境内にだんじりが集結、岸和田の秋の風物詩になっています。

行基菩薩の像を祭る久米田寺の「開山堂(行基堂)」

工事中の飲み水や洗い水に使用されたとされる井戸「行基測」の跡

守り引き継がれ1300年 世界かんがい施設遺産に

戦国時代に入ると池の管理は、久米田寺から灌漑地域14カ村(池尻、田治米、大町、西大路、箕土路、下池田、小松里、額、荒木、中井、吉井、春木、加守、西之内)で結成された地域共同体・久米田池郷に引き継がれます。久米田池郷による管理は昭和32年(1957)まで続き、以降は、久米田池土地改良区が管理・運営を行っています。

久米田寺による管理から約1300年間、長期にわたって人の手で守られてきたことや、灌漑農業の発展に貢献した技術が評価され、久米田池は平成27年(2015)に「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

上／久米田池にまつわる歴史的資料を展示する久米田池交流資料館
右／久米田池交流資料館では「世界かんがい施設遺産」の盾も展示

上／年間を通して100種以上もの鳥類が訪れる
右／久米田池西堤の桜並木。多くの市民が花見を楽しむ

Check

いつまでも岸和田のオアシスであるために

現在の久米田池は、農業用水源としてはもちろん、養魚池として利用されていたこともあり、数々の渡り鳥が飛来する「鳥の国際空港」としても認知されています。また、大阪府の「オアシス整備事業」により歩道やデッキが設けられ、市民がジョギングをしたり、畔のベンチでくつろいだりする光景も見られるようになりました。久米田池土地改良区は、「久米田池をまもる会」や「久米田池都市農村交流推進協議会」とともに清掃活動やイベントを実施するなど、今や多彩な顔を持つ岸和田のオアシスを守り続ける活動をしています。

和泉葛城山頂上には「和泉葛城山ブナ林」が広がっている。標高が低く温暖な地域に生育している貴重なブナ林で、大正12年(1923)に国指定の天然記念物に

久米田池は「世界かんがい施設遺産」です

写真は久米田池全景。45.6ヘクタールの水面面積は池として府内最大。貯水量は157万t、周囲は2650mある

岸和田の
いまむかし

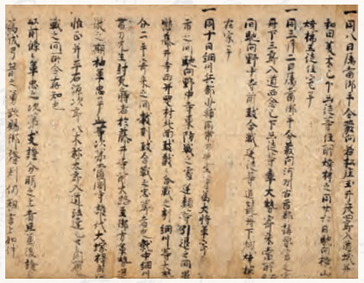
岸和田市の100年は、誇るべき歴史の上に

わがまちヒストリー

南北朝争乱の軍忠状に見られる岸和田氏の活躍の記録

14世紀、朝廷が南朝と北朝に分かれて対立し、半世紀にわたって繰り広げられた南北朝争乱。その初期の戦いの中に、「岸和田」という名の一族の存在がありました。岸和田治氏、定智、快智という岸和田地域を支配していた一族で、楠木正成の指揮下で戦った湊川の戦いなど各地の合戦で活躍した記録が、軍忠状という戦場でのできごとや自らの手柄を報告した古文書に残されています。

岸和田軍忠状は計6通が現存しており、「岸和田」の名が確認できる最古の歴史資料として大変貴重なものです。岸和田市内でのできごととしては、治氏が八木城に籠城して幕府軍と戦っていたことが記されています。



上／重要文化財に指定されている「和田家(みきたけ)文書」の一通「岸和田快智軍忠状案」
左／八木城があったと推測されている現在の大町付近

現在の貝吹山古墳。貝吹山の名前が付いたのは、戦の最中ここでほら貝が吹き鳴らされたという伝承による

岸和田を巡る武将たちの攻防

三好一族が登場する久米田池周辺の戦い

時は戦国時代。畿内の大半をおさえ室町幕府の実権を握り、天下人の目前まで迫っていた三好長慶、そして三好実休、安宅冬康、十河一存の三好4兄弟。しかしその絶頂期は、長くは続きませんでした。

永禄4年(1561)4月、岸和田城の城主だった十河一存が急死します。このことで和泉の支配がゆるみ、敵対していた河内の畠山高政、近江の六角義賢らが挙兵。三好長慶は三好実休らを援軍として岸和田城に向かわせました。しかし、岸和田城はすでに畠山軍に取り囲まれていたため、実休は久米田池そばの貝吹山古墳に本陣を置きます。数カ月にわたり周辺で戦いが繰り広げられ、永禄5年(1562)の3月に起きたのが、決着となる「久米田の戦い」でした。攻防の末、手薄になった実休軍の本陣を畠山軍が攻め、実休は戦死。総崩れとなった実休軍は堺へ撤退し、そのまま一族の出身地である阿波へ帰国します。のちに三好家は衰退し、信長・秀吉の時代を迎えます。この岸和田での合戦はその後の日本の歴史に大きく関わるできごとだったのかもしれません。

古墳を陣に三好実休が奮戦!

春木川を背に戦う畠山軍に対し、前線へ兵を送り続ける実休。しかし、攻撃部隊と本陣との間に距離が空き、本陣はわずか100騎の馬廻衆と実休を残すのみに。根来衆の奇襲を受け、馬廻衆は全滅し、実休も討ち取られました。

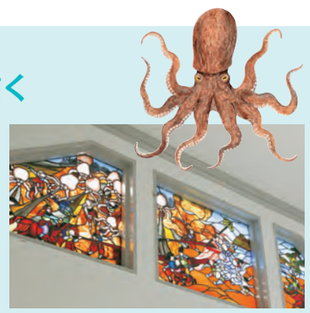
久米田の戦いの戦況を記録する『足利季世紀』には、実休が鉄砲により殺されたと記されているが、死因は定かではない

「三好実休画像」妙国寺(堺市)蔵
茶道を学び、寺を創建するなど文化への造詣も深かった

三好実休戦没碑。額(小松里)町の住宅街にひっそりと佇む

岸和田合戦の伝説を描く「蛸地蔵縁起絵巻」

岸和田城が雑賀・根来衆に攻め入られた時、大蛸に乗った法師と数千の蛸が、すさまじい勢いで敵を倒し、城を救ったという伝承があります。数日後、その法師は堀から見つかった傷だらけの地蔵の化身だということがわかり「蛸地蔵」として岸和田で大切に祭られてきました。



南海蛸地蔵駅のステンドグラスは絵巻のワンシーンをモチーフにしたもの

蛸地蔵を祭っている天性寺。地蔵堂として日本最大級の大きさを誇る

天性寺では、約10mある蛸地蔵縁起絵巻のレプリカを用いて物語を紹介してくれる(要事前問合せ)

岸和田合戦で火蓋を切った羽柴秀吉の「紀州攻め」

天正5年(1577)、織田信長による紀州雑賀攻めを皮切りに、本格的な紀州攻めが始まります。信長は羽柴秀吉の家臣・中村一氏を岸和田城の城代として置き、雑賀・根来の兵と対峙していました。本能寺の変で信長が倒れ、紀州攻めを引き継いだ秀吉は、天正11年(1583)に一氏を岸和田城主に格上げし、改めて最前線での和泉防衛を任せます。紀州勢との攻防は徐々に激化していき、天正12年(1584)、小牧・長久手の合戦に出陣した秀吉の大坂不在をついて、約3万もの雑賀・根来の大軍が岸和田城への攻撃を開始(岸和田合戦)。城を守るのは地元の武士を集めたわずか※8000の兵でしたが、一氏は岸和田城を見事守り切りました。

(※兵の数は諸説あり)

翌年、小牧・長久手の合戦の休戦・講和ののち、秀吉の本隊が岸和田城に入城。約10万もの兵で紀伊国への攻撃を開始します。雑賀・根来の城を次々と攻略し、根来寺を制圧。さらに軍を進めた秀吉は、紀州勢が籠城する太田城を水攻めで落とし、紀南の攻略も進め、ついに紀州攻めを成し遂げました。

「中村一氏肖像」
東京大学資料編纂所所蔵
模写

岸和田合戦後、近江国水口城、駿河国駿府城の城主となる

岸和田城を拠点とした紀州攻め

岸和田城のすぐ南西、貝塚市の近木川に沿って千石堀城(今城)、高井城、積善寺城といった雑賀・根来の出城が点在し、攻防が繰り返された

岸和田にまつわる合戦の歴史

延元1・建武3年(1336)9月	岸和田氏、八木城にて幕府の軍を迎え撃つ【和泉国・河内国の争乱】
延元2・建武4年(1337)この年	岸和田氏、南朝方に軍忠状を提出
永禄5年 (1562) 3月	三好実休が畠山高政軍との戦いにて戦死【久米田の戦い】
天正11年(1583) 4月	羽柴秀吉、中村一氏を岸和田城城主に
天正12年(1584) 3月	雑賀・根来衆と岸和田城の中村一氏が戦う【岸和田合戦】
天正13年(1585) 3月	羽柴秀吉、岸和田城に入り、根来寺を攻め壊滅させる
7月	羽柴秀吉の叔父・小出秀政が岸和田城城主に
文禄4年 (1595) この年	小出秀政、岸和田城天守造営にとりかかる
慶長2年 (1597) この年	岸和田城天守落成
慶長9年 (1604) 3月	小出秀政没。長子の吉政が岸和田城城主に
慶長18年(1613) 3月	小出吉政没。長子の吉英が岸和田城城主に
慶長19年(1614) 10月	大坂冬の陣。小出吉英、徳川方として出陣
慶長20年(1615) 4月	大坂夏の陣。小出吉英、弟の吉親が岸和田城を守る

岸和田の
いまむかし
岸和田市の100年は、誇るべき歴史の上に
わがまち
ヒストリー

13代にわたった岡部藩政時代

大坂の南の守りとして武に長けた岡部家が藩主に

大坂の陣が終わり、江戸時代へ。小出家、松平家に次いで寛永17年（1640）に岸和田を治めることになったのが岡部宣勝です。この頃、徳川政権が安定するまでは、各地で大名の転封（配置替え）が繰り返されており、宣勝も美濃国大垣、播磨国龍野、摂津国高槻を経て、岸和田藩岡部家の初代藩主となりました。

江戸時代を通し、大坂は幕府の直轄領であり、西国支配の拠点でした。そんな要所を守るという特別な任務を請け負っていたのが、大坂城の南を守る岸和田藩と、西を守る尼崎藩でした。その重要な役目の一方を岡部家が任せられた理由に、岡部家が関ヶ原の戦いの前から徳川家の家臣であった譜代大名であることや、「岡部の黒鬼」と称された宣勝の父・長盛から続く武勇の家柄だったことがあげられます。

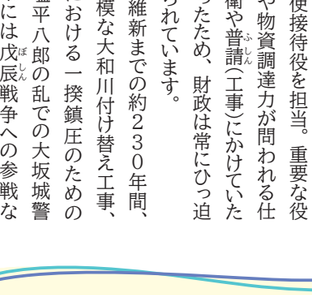
また、大坂の軍力が手薄になることを避けるため、岸和田藩と尼崎藩は参勤交代を交互とし、有事の際には、どちらかの藩がすぐに大坂城へ軍の動員をできるようにしていました。

人や物資の調達力を生かし多彩な役目を果たした岡部家

岡部家は初代の宣勝以降、13代にわたって藩主を務めることになります。江戸時代はどこの藩も財政難に苦しんでおり、岸和田藩も例外ではありませんでしたが、二代・行隆は福井藩に次いで全国で2番目に藩札を発行し、財政の確立に努めました。一方で、岡部家は六代まで大坂にて朝鮮通信使接待役を担当。重要な役目ながら、財力や物資調達力が問われる仕事で、大坂城守衛や普請（工事）にかけていた費用も膨大であったため、財政は常にひっ迫していたと考えられています。

それでも明治維新までの約230年間、元禄年間の大規模な大和川付け替え工事、天明の大飢饉における一揆鎮圧のための藩兵派遣、大塩平八郎の乱での大坂城警備、さらに幕末には戊辰戦争への参戦など、時の藩主たちはさまざまなできごとに対処してきました。

門前町にある岡部歴代藩主の菩提寺・泉光寺。初代藩主・宣勝が隠居した地を寺に改めた



岸和田藩岡部家 歴代藩主（任期）

- 初代 宣勝（1640～1661）
- 二代 行隆（1661～1686）
- 三代 長泰（1686～1721）
- 四代 長敬（1721～1724）
- 五代 長著（1724～1756）
- 六代 長住（1756～1772）
- 七代 長修（1772～1776）
- 八代 長備（1776～1803）
- 九代 長慎（1803～1833）
- 十代 長和（1833～1850）
- 十一代 長発（1850～1855）
- 十二代 長寛（1855～1868）
- 十三代 長職（1868～1871）

5万3000石の岸和田藩を約230年にわたって統治

岡部宣勝は、6万石で入城。さらなる外堀を築いて周辺のまちを取り込み、城下町を拡大。城主を息子・行隆に引き継ぐ際に、2人の弟たちに合計7000石を分与し、以後明治維新まで約230年続く5万3000石の岸和田藩となりました。

宣勝は岸和田藩の礎を築き、寛文元年（1661）に64歳で息子・行隆に藩主を引き継いで隠居。土生村（現在の門前町）で余生を過ごした

左／岸城町にある岡部家の家臣・佐々木家住宅。長屋門や土塀が武家屋敷の面影を今に残す（建物は非公開）

Check

三代目が勧進した稲荷神の祭りが岸和田だんじり祭の起源!?

一説には、元禄16年（1703）に、岡部三代藩主・長泰が京都の伏見稲荷を勧進（分霊）し、城下の人々の参拝を許した稲荷祭が岸和田だんじり祭の原型とも。当初は領民が簡素な木箱を曳いて練り歩き、さまざまな芸を披露したともいわれています（諸説あり）。

岸和田城南西にある三の丸神社。寛永17年（1640）創建

「岡部長泰肖像」泉光寺所蔵
大和川付け替え工事、朝鮮通信使の接待など、重要な役割をこなした三代目

岸和田の産業を切り拓いた寺田財閥

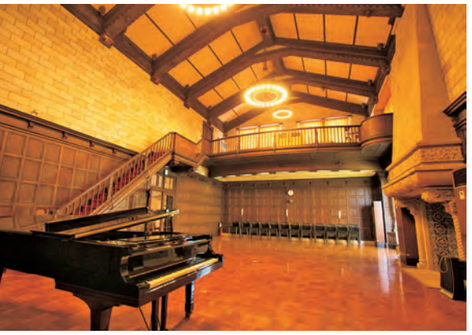
紡績業、煉瓦業などの工場エリアが拡大していき、岸和田は近代的なまちへと変貌していった

銀行発足を皮切りに寺田家繁栄への足場を確立

明治以降の岸和田のまちの発展を語る上で欠かせないのが、地方財閥「寺田家」です。元々寺田家は、江戸時代から続く酒造業者でした。近代国家として発展しようとしていた明治初頭の日本において、寺田家の長男で、実業家になることをめざしていた甚与茂は、銀行の必要性・将来性に注目します。岸和田にも銀行を作るべく、甚与茂は25歳にして旧士族や有力者らが集まる銀行創立委員に加わり、明治11年（1878）に第五十一銀行を立ち上げました。その後、わずか3年で同銀行の頭取に就任します。

さらに甚与茂は、鉄道、煉瓦、紡績、電力など多くの企業経営にも参画し、各社の社長も歴任。岸和田の経済発展に大きく関わっていきます。なかでも明治27年（1894）に創業した岸和田紡績株式会社（⬇P28）は、急成長を遂げ、明治末期には日本十大紡績会社に数えられるほどになりました。甚与茂は一代にして莫大な富を築き上げ、寺田家は大阪を代表する地方財閥へと成長していったのです。

甚与茂が頭取に就任した第五十一銀行



岸和田紡績の社交場として昭和7年（1932）に建てられた自泉会館（国登録有形文化財）。甚与茂の記念館的建物で、イベントホールや会議場として利用されている

3つのグループで躍進岸和田を企業城下町へ

寺田財閥は、甚与茂の南寺田家、実弟・元吉の北寺田家、異父弟・利吉の堺寺田家の3家に分かれ、それぞれが岸和田で影響力のある企業を設立していきました。南寺田家は岸和田紡績のほか、和泉銀行、和泉貯蓄銀行を設立、北寺田家は3家で唯一酒造業を継続しながら、製鋼や織物などを扱う帝国産業株式会社を運営、堺寺田家も寺田銀行と寺田紡績などを開業します。多くの寺田系列の企業や銀行が海岸沿いや紀州街道沿いに立ち並び、岸和田はまさに企業城下町の様相を呈していました。

戦後の財閥解体によって、寺田財閥は解消されますが、会社や銀行として建てられた近代建築群は今でも旧市街に見られ、岸和田城周辺の自泉会館や五風荘といった寺田家ゆかりの建物とともに、寺田財閥の隆盛を今に伝えています。

堺寺田家の二代目当主で、岸和田市長も務めた寺田利吉の別邸として建設された近代和風建築の五風荘（岸和田市指定有形文化財）

寺田財閥の草分け“寺田甚与茂”とは

幕末の嘉永6年（1853）、岸和田城下の有力商人・寺田家の長男として誕生。商売を学ぶため11歳で質屋に奉公へ。岸和田で多様な企業経営を成功させ、大正全国富豪番付では西日本21位になるほどの富豪になりました。

自泉会館に設置されている寺田甚与茂胸像

岸和田の
いまむかし

岸和田市の100年は、誇るべき歴史の上に

わがまち
ヒストリー

市民による天守再建
まちのシンボル「岸和田城」

昭和39年（1964）の岸和田城天守閣。
市街や神於山（こうのやま）なども望む岸和田市役所からの眺め

再建天守の高さは天守台を除き約22m。SRC造（鉄骨鉄筋コンクリート造）で、クレーンなどを用いた当時としては大規模な建造工事だった

世界でも類を見ない「城型の図書館」として再建

慶長2年（1597）に小出秀政によって築かれた天守は、文政10年（1827）に落雷によって焼失。以降再建されることはなく、明治時代に入ると二の丸御殿や伏見櫓、門なども取り壊され、残された本丸と二の丸のみが昭和初期に千亀利公園として整備されました。

公園は市民の憩いの場でしたが、天守復興を望む声も少なくありませんでした。昭和28年（1953）、市庁舎建設のために図書館が撤去されることになります。それを期に建物内部を図書館とする天守閣建造が協議されることに。岸和田市PTA協議会と岸和田城址保存会からそれぞれ市議会への請願書が提出され、さらに市民ひとりひとりの寄附や旧藩主・岡部家の子孫の要望などもあり、再建が決定しました。

総工費は3470万円で、そのうち4460万円が寄附だったとされています。約1年の工期を経て、昭和29年（1954）の11月、127年ぶりに天守台の上に新たな天守閣が誕生しました。内部が図書館であるという斬新さに加え、戦後では全国でも2番目と天守の再建が早かったため注目を集めたといいます。現在内部には歴史資料を展示し、市外の人も多く訪れる天守閣。南海電車の車窓からもその勇壮な姿が確認できる岸和田市を代表するシンボルです。

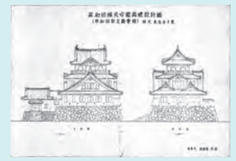
図書館へ“登城”するというユニークな体験ができる場所だった

昭和41年（1966）。天守閣内の図書館を利用する、当時の子どもたちの様子

岸和田市の民間建設会社と建築家・池田谷久吉により再建

天守の再建工事は岸和田市内の岩出建設株式会社が請け負い、設計を河内長野市の重要文化財・観心寺恩賜講堂なども手掛けた池田谷久吉が担当。「再建岸和田千亀利城天守　工事」という名で資料に残っていますが、元の木造5層天守の復元ではなく、3層3階の図書館新築工事として施工されました。

「岸和田城天守閣再建計画書」と書かれた建築家・池田谷久吉による図面



上／建設工事中の様子。当時は岸和田高校側の堀に橋がかかっていた

右／奈良の東大寺の瓦を焼いた瓦業者が作った約110kgの鯱瓦を吊り上げる作業

平成4年（1992）に竣工した平成の大改修も岩出建設が施工した

写真提供：岩出建設株式会社

天守閣より前に完成していたみどころ「八陣の庭」

国指定文化財である岸和田城庭園（八陣の庭）は、天守閣の完成に先行し、昭和28年（1953）に完成。京都の寺社を中心に数々の名庭を手掛けていた作庭家・重森三玲の設計による枯山水庭園で、三国志の名軍師・諸葛孔明が考案した陣法・八陣をイメージした庭です。城郭の縄張りに見立てた庭の中央に石組みで〝大将〟を置き、さらに周囲に天・地・竜・虎・風・雲・蛇・鳥の八陣も石組みで表現。三玲は、この陣を攻める陣形ではなく、守りの陣と解釈し、平和の願いを込めた庭だとしています。

八陣の庭は、その芸術性と近代庭園史における学術性の高さから、平成26年（2014）に国の名勝に指定されました。また、かつては庭園を生かした生け花や舞踏のショーが行われ、現在も砂紋描きのイベントを開催するなど、貴重な庭でありながら芸術・文化を発信する場所にもなっています。

ここに注目！ 上空からの鑑賞も意識した石組

八陣の庭は、天守閣や航空機など、上空から鑑賞されることも想定し設計されています。モダンで幾何学的な石組み配置の妙を堪能できます。

ここに注目！ 360度どこからも鑑賞できる回遊式の庭園

八陣の庭は園内を歩いて鑑賞できる「回遊式庭園」で、庭の周囲どこからでも上・中・下段で構成された庭の立体感や奥行きを楽しめます。

八陣の庭で水をまく重森三玲

作庭家・重森三玲とは?

明治29年（1896）、岡山県生まれ。日本美術学校で日本画を学び、建築や生け花への研究も進めながら独学で庭園学を修める。京都市の国指定名勝・東福寺本坊庭園を代表とする枯山水庭園の作庭で名高い名作庭家。

ライトアップやイベント利用も。市民に愛され、親しまれている庭園

Check

見に行ってみよう！

大威徳寺多宝塔
三間多宝塔本瓦葺　附棟札2枚

新緑、紅葉ともに美しい名刹。室町時代建築の多宝塔は建築の記録を記す附棟札とあわせて重要文化財に指定されている。

摩湯山古墳

全長約200m、前方部幅約100m、後円部径約130mで市内最大の前方後円墳。4世紀後半頃の泉州で力のあった在地首長の墳墓と推測。

兵主神社本殿
三間社流造正面軒唐破風付檜皮葺

天照大神・八幡大神・菅原道真を祭る古社。国指定文化財の本殿は豊臣秀吉の再建と伝えられ、絢爛な桃山建築の美を今に伝える。

積川神社本殿
三間社流造正面千鳥破風付檜皮葺

崇神天皇の御代に創立されたと伝わる格式ある和泉五社の一つ。本殿は平成28年（2016）の保存修理により朱が鮮やかな美しい姿に。

まだある！ 岸和田市の国指定文化財

全部で14!

史跡	摩湯山古墳（まゆやま こふん）	
名勝	岸和田城庭園［八陣の庭］（きしわだじょうていえん はちじんのにわ）	➡P15
天然記念物	和泉葛城山ブナ林（いずみかつらぎさん ぶなりん）	➡P8
建造物	兵主神社本殿 三間社流造正面軒唐破風付檜皮葺（ひょうずじんじゃ ほんでん さんげんしゃながれづくり しょうめんのさからはふつき ひわだぶき）	
建造物	積川神社本殿 三間社流造正面千鳥破風付檜皮葺（つがわじんじゃ ほんでん さんげんしゃながれづくり しょうめんちどりはふつき ひわだぶき）	
建造物	大威徳寺多宝塔 三間多宝塔本瓦葺 附棟札2枚（だいいとくじ たほうとう さんげんたほうとうほんがわらぶき つけたり むなふだにまい）	
書跡	紙本墨書 楠家文書（久米田寺蔵）（しほんぼくしょ くすのきけ もんじょ）	
書跡	久米田寺文書［百三十二通］十八巻（くめだじ もんじょ ひゃくさんじゅうにつう じゅうはっかん）	
書跡	紙本墨書 大塔宮令旨（久米田寺蔵）（しほんぼくしょ おおとうのみや りょうじ）	
書跡	紙本墨書 北畠覚空書状（久米田寺蔵）（しほんぼくしょ きたばたけかくう しょじょう）	
工芸品	刀 無銘 伝一文字作（岸城神社蔵）（かたな むめい でんいちもんじさく）	
絵画	絹本著色 星曼荼羅図（久米田寺蔵）（けんぽんちゃくしょく ほしまんだらず）	
絵画	絹本著色 安東蓮聖像（久米田寺蔵）（けんぽんちゃくしょく あんどうれんしょうぞう）	
絵画	絹本著色 仁王経曼荼羅図（久米田寺蔵）（けんぽんちゃくしょく にんのうきょうまんだらず）	

岸和田のいまむかし

岸和田市の100年は、誇るべき歴史の上に

わがまちヒストリー

岸和田城歩き比べ

現在の空撮写真と約350年前の絵図を比べて魅力再発見！

写真と古地図でチェック

今

現在の岸和田城

本丸、二の丸、内堀が現存。天守閣、櫓門（やぐらもん）などの復興建築が往時の雰囲気を醸し出します。

歴史展示で城の歩みをもっと深く

上／館内に展示されている岡部岸和田藩三代藩主・長泰の紫糸威伊予札四枚胴具足
右／図書館時代を経て、天守閣は昭和51年(1976)に歴史資料館として再スタート

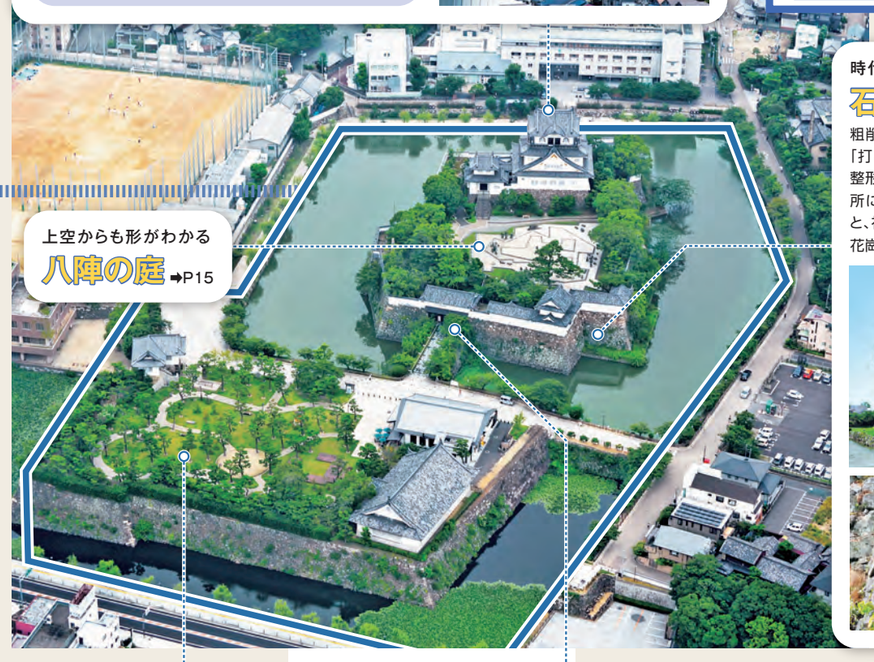
天守閣の内部では岡部岸和田藩の関係資料や、岸和田市の考古資料などを展示。毎年春秋には企画展も開催されています。

遺構の上に立つまちのシンボル

天守閣・天守台

南北・東西ともに約18mある天守台は、初代天守が築かれた時代から現存。新たな3層天守閣が再建されたことで、荘厳な城の風格を今に蘇らせました。

天守閣の最上階は回廊展望台になっていて、岸和田市街を360度見渡せる



上空からも形がわかる
八陣の庭 ➡P15

時代の流れを感じる遺構

石垣

粗削りした石を隙間なく積む戦国時代の「打込ハギ（接合）」を主とし、石を四角に整形した江戸時代の「切込ハギ」が補修箇所に見られます。石材としては和泉砂岩と、神於山と瀬戸内海で採掘したとされる花崗（かこう）岩などが確認されています。

上／堀にせり出した平地部分は石垣補強のために作られた“犬走り”という珍しい遺構
左／9月の岸和田だんじり祭の開催前には石垣清掃の様子が見られる

岸和田藩は甲賀忍者を雇っていた？

岸和田藩主の岡部家はかねてから甲賀衆との繋がりが深く、岡部家の軍事規定を記す享保年間の『享保備定（きょうほうびてい）』にも、“甲賀五十人”の記載があり、雇っていたことが記録されています。岸和田の地で忍者が活躍していたかも？と想像するとロマンがありますね。

ハリウッド映画のロケ地に！

忍の世界を描いた映画『G.I.ジョー：漆黒のスネークアイズ』（2021）に岸和田城が登場！犬走りをはじめとする城内で迫力のアクションが繰り広げられました。

フォトジェニックな岸和田城の夕景

岸和田城は「続日本100名城」や「日本の夕陽百選」にも選出されています。

第1回きしわだフォトコンテスト最優秀賞は岸和田城の夕景（撮影：奥田知行さん）

正保元年（1644）の岸和田城

岡部宣勝が入城して4年後の城郭。当時の岸和田城は海岸が近く、城下町が浜辺付近まで広がっていたことがうかがえます。

岸和田城天守閣内には絵図をベースに作られた城郭ジオラマが展示されている

この絵図は…

正保城絵図 和泉国岸和田城図

しょうほうしろえず いずみのくにきしわだじょうず

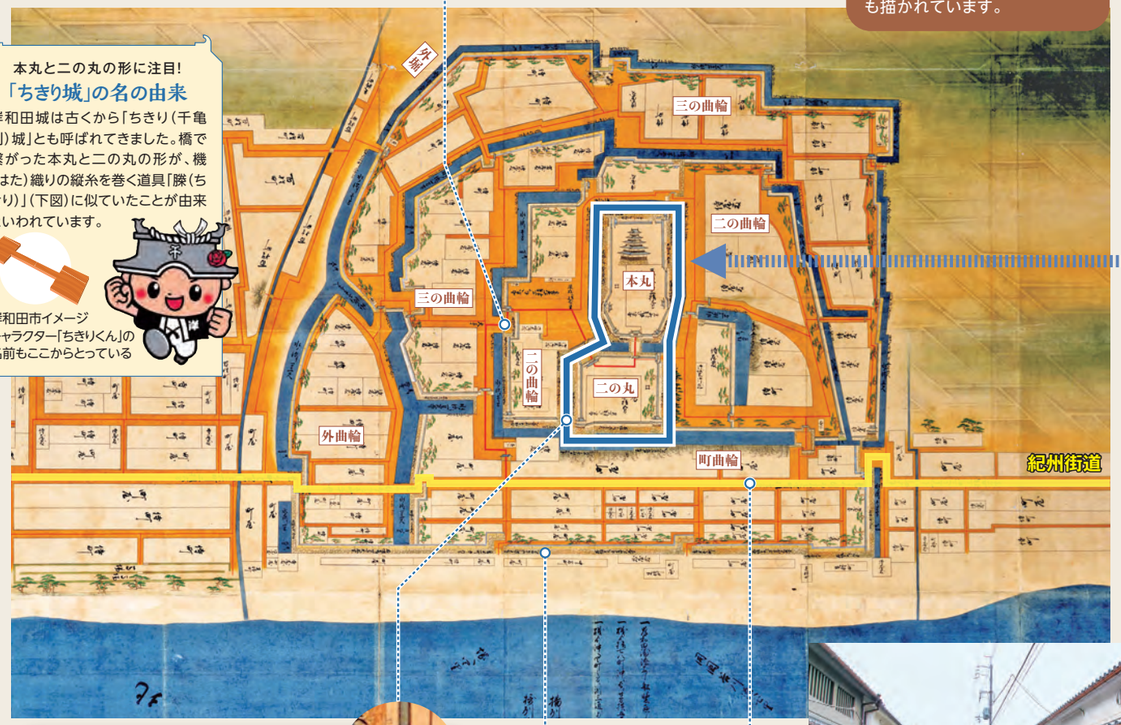
正保元年（1644）に幕府が諸藩に命じて作成させた城絵図のうち岸和田城のもの。城郭内の建造物、石垣、堀の位置などが精細に記載され、5層の天守も描かれています。

左／明治天皇が訪れたことを記念する「駐蹕記念碑」
下／城絵図にも地中門が描かれており、場所も一致している

高校内に残る築城当時の遺構

門の土台の石垣

岸和田高校のグラウンドにある「駐蹕（ちゅうひつ）記念碑」の土台となっている石垣は、二の曲輪（くるわ）と三の曲輪を繋ぐ地中門（北中門）の石垣が、築城当時のまま現存していると考えられています。※学校内のため原則見学不可。



本丸と二の丸の形に注目！

「ちきり城」の名の由来

岸和田城は古くから「ちきり（千亀利）城」とも呼ばれてきました。橋で繋がった本丸と二の丸の形が、機（はた）織りの縦糸を巻く道具「縢（ちきり）」（下図）に似ていたことが由来といわれています。

岸和田市イメージキャラクター「ちきりくん」の名前もここからとっている

幕府からの信頼の証

伏見櫓跡

ふしみやぐらあと

かつては二の丸に、元和9年（1623）に京都・伏見城から移築された伏見櫓がありました。この櫓は徳川家にとって要所であった地の城に設置されていたもので、現存するものでは福山城のものなどが有名です。

伏見櫓があった二の丸北東角の石垣。岸和田城は大坂城の南の守りとして、伏見櫓を配置されるほど重要な城だった

大坂ー和歌山間を繋ぐ脇街道

紀州街道

きしゅうかいどう

岡部岸和田藩の参勤交代にも使用されていた脇街道。絵図上で見られる鍵状の箇所は、侵入者をかく乱する「遠見遮断（とおみしゃだん）」になっています。

伝統的建造物が連なる紀州街道の本町エリア。周辺35件が市の歴史的景観建築物に指定されている

かつての御殿跡

二の丸広場

藩主が政務を行い、大奥もあった二の丸御殿跡。公園として整備され、市民道場の「心技館」や二の丸広場観光交流センターが建っています。

松の木と鐘楼をモチーフにした時計が城内の歴史的景観と調和している

海からまちを守っていた遺構

防潮堤石垣

ぼうちょうていいしがき

元和5年（1619）、松平康重（やすしげ）が城主の頃に築かれた警備と防潮を目的とした石垣で、現在は中町の公園にその一部が残っています。

石垣は約800mあったとされているが、明治維新後に大部分が取り壊された

天守閣の後に復興

櫓門・多聞櫓・隅櫓

やぐらもん・たもんやぐら・すみやぐら

城の正門・櫓門と、本丸北西部分に連結されている多聞櫓と隅櫓は昭和44年（1969）に再建されました。白漆喰塗りで統一され勇壮な姿です。

大手門の上に櫓を設けた櫓門

岸和田のいまむかし

鉄道&道路、区画整理で発展
都市整備によるまちづくり

交通インフラの整備や、土地利用の増進、それらを繰り返し、岸和田市は発展してきました。今のまちの形となった歴史やきっかけを振り返ってみましょう。

約50年前の大北町周辺
のちの府道39号岸和田港塔原線となる道路が港から山へと延びる
写真提供：岸和田市立春木小学校

令和2年（2020）の土生町周辺
鉄道、駅の高架化で、道路渋滞を軽減

賑わいの拠点 鉄道と駅の歴史

このまちに初めて鉄道の駅が誕生したのは、明治30年（1897）10月のこと。日本最古の私鉄・南海電鉄の本線上に岸和田駅が設置されました。明治27年（1894）の岸和田紡績（➡P28）の設立以降、近代産業の工場や工員寮が立ち並び、まちは駅が整備されるほど大きくなっていました。貨物運搬も鉄道輸送へと切り替わっていきます。昭和に入ると商店が〝商店街〟の形を構成するようになり、岸和田駅前通商店街をはじめとするアーケードが賑わいの中心に。

浜手の南海岸和田駅に対し、山手のJR東岸和田駅は、昭和5年（1930）に阪和電気鉄道の「土生郷駅」として設置。都市基盤が整備されていなかった山手において、大阪・和歌山間を結ぶ交通機関の誕生は、まちの発展に繋がりました。現在では駅直結の商業施設、駅前複合施設が充実し、岸和田市の東の玄関口として賑わいを創出しています。

昭和40年代の岸和田駅前通商店街。だんじりが通れるように、設置された初代アーケードは高さが日本一と話題に

SINCE1930
JR東岸和田駅

平成29年（2017）10月に上下線ともに高架化され現在の姿に。駅前再開発「防災街区整備事業」も実施され、駅周辺には防災公園、不燃化建築の公共施設、マンションなどが建設されました。

飲食店、クリニック、東岸和田市民センターが入る駅前複合施設「リハーブ」

上／JR東岸和田駅初代駅舎。昭和62年（1987）頃の様子
写真提供：京都鉄道博物館

下／南海岸和田駅初代駅舎。昭和3年（1928）頃の様子

SINCE1897
南海岸和田駅

現在の駅舎は3代目。駅の上に駐車場を設ける、全国初の「駅部一体整備型連続立体交差事業」として進められ、平成4年（1992）に上り線、2年後に下り線が完成しました。出入口の上の窓は半円形ステンドグラスをモチーフとし、2代目駅舎の特徴も取り入れられています。

昭和4年（1929）、2代目駅舎に改装。近代建築様式をとったハイカラな造り

時勢に順応し整備されてきた道路

岸和田エリアの交通インフラ整備は、城下町があった浜手の地域を起点に放射状に行われていきました。江戸時代に整備された大阪と和歌山を繋ぐ主要な幹線道路・紀州街道から各所へ道が延び、まちが形成され、現在の旧市街の骨格となっていきます。

自動車の時代になってからは、南北移動のメインロードは府道30号、府道204号（旧国道26号）へと移り変わり、東西においては府道39号と府道40号が整備され、市内の交通ネットワークも強化されていきました。

時代が進むにつれ、増加する交通量に対応するため第二阪和国道（➡P20）が開通。さらに、関西国際空港開業に向けての都市計画道路の建設ラッシュとなり、府道29号や阪神高速4号湾岸線が整備されました。

① 阪神高速4号 湾岸線
湾岸線の岸和田大橋は全長445mもの大アーチ橋で、岸和田市沿岸部のランドマークの一つです。

② 紀州街道
岸和田城の西側・本町地区では、沿道の旧商屋が保存され、城下町の風情を今に伝えています（➡P52）。

昭和中期。春木を通る紀州街道の様子
写真提供：岸和田市立春木小学校

③ 府道204号 堺阪南線
第二阪和国道が開通するまでは国道26号であったため、「旧26（きゅうにーろく）」との愛称も。

\\ こんな整備・取組みも //

「鉄道高架化で都市交通問題を解消」

南海本線高架事業
空港開港時を完成目標に
'88成人式 ぜひ ご出席ください

上／市が発行している『広報きしわだ』で、工事の記録や進捗を市民に向けてたびたび発信
右／高架化に合わせ道路の拡幅も行った府道39号岸和田港塔原線

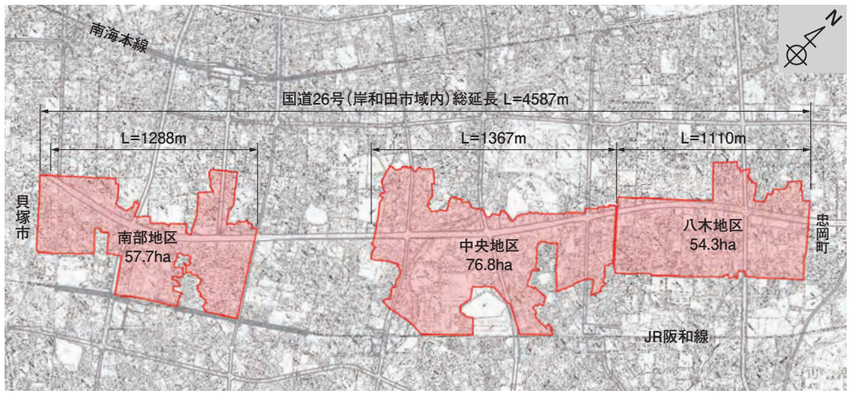
道路の整備だけでなく、鉄道高架化による道路の利便性、快適性のアップも図られてきました。南海岸和田駅、JR東岸和田駅周辺では鉄道高架化により、踏切渋滞の緩和、踏切事故の解消を実現しています。南海本線、JR阪和線とともに地域の理解と協力を得ながら長期にわたって進められた一大プロジェクトでした。

区画整理による土地利用の増進

これまでの岸和田市での大きなインフラ整備の一つに〝第二阪和国道の建設〟があります。経済の発展に伴って増加してきた大阪～和歌山間の交通渋滞の緩和を図るため、新たな国道26号（第二阪和国道）の建設が計画された事業です。道路の整備と連携して八木地区、中央地区、南部地区の3区画については、新たな土地の整備もスタート。道のないところに道路を敷き、沿道の土地利用の増進を図る、日本の都市計画において〝都市計画の母〟とも称される「土地区画整理事業」を並行して行ったのでした。

工事は水路や公園の築造、建物移転、上下水道移設、整地など多岐におよび、また、急速な宅地化を見込んで公共施設の整備改善を行うなど、本格的な都市化をめざしたまちづくりとなりました。昭和41年（1966）の八木地区の着工から、中央地区の竣工に至る平成24年（2012）まで、46年という膨大な年月と市民の協力の上に、一帯のまちは整備されたのです。

第二阪和国道区画整理事業

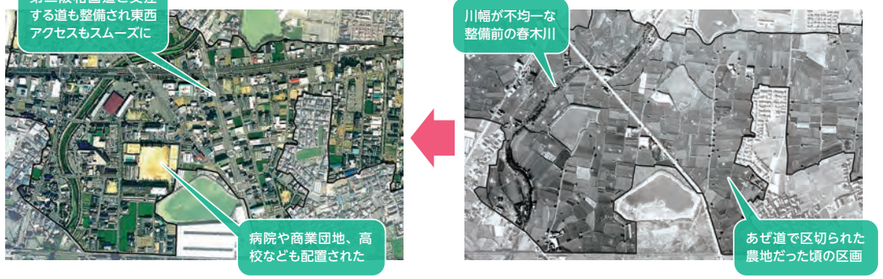


第二阪和国道は昭和54年（1979）に岸和田市内全線開通。写真はセレモニーの様子

Pick up

区画整理の変遷

多くの農地が宅地に変わり、新たな道によって区画が整理されました。多様な建築物も区画内に増えていきました。



こんな整備・取組みも

「自然豊かな水辺の空間づくり」

緑豊かな遊歩道が整備されている春木川沿い

「豊かな自然環境と歴史的環境が織り成す『個性的快適環境都市』の創生」を目標に、河川の改修や管理も進められています。緑ある風景を生かし整備することで、よりよい景観が形成されています。

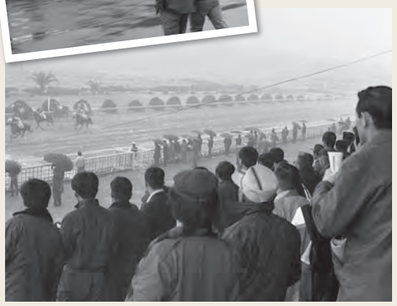
良質な都市空間の形

6車線のゆとりある第二阪和国道。現在沿道にはさまざまな有名企業のロードサイド店舗が軒を連ねる

水路工事

在来水路を基盤に将来の下水道計画も考慮し、区画道路などに側溝を設けて水路を整理

ご存知でしたか？「岸和田市中央公園」の歴史



昭和49年（1974）3月、春木競馬場最後のレースに集まる観客。当日は雨だった

関西を代表する競馬場を都市公園へと整備

実はこの公園が元々競馬場だったことを知っている市民は今では少ないかもしれません。約100年前の昭和4年（1929）、この場所に競馬場が誕生しました。その名を「春木競馬場」といい、当時は関西を代表する競馬場として人気を博しており、全国的にも高い売り上げを誇る名物競馬場でしたが、昭和49年（1974）3月、園内記念碑にも記されている「青少年や地域住民に及ぼす影響などを考慮して」などの理由から完全廃止となりました。

翌年から跡地の整備が進められ、昭和53年（1978）に岸和田市中央公園は開園しました。現在は、災害時の市民の避難場所でもあり、応急給水タンクも設置。都市公園としても高い評価を受け、日本の都市公園100選に選定されています。

現在は市のスポーツとイベントの拠点に

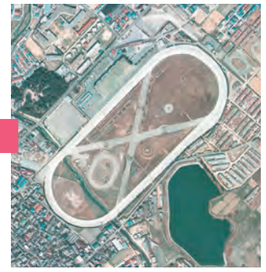
甲子園球場の約5倍の広さを誇る岸和田市中央公園は、桜、ツツジ、バラ、新緑に紅葉と、季節を実感できる市民の憩いの場であると同時に、岸和田市総合体育館やプール、グラウンドなども整備された運動公園でもあります。近年はスケートパークを整備するなど、新たなスポーツの誘致も行っています。また、岸和田市民フェスティバルをはじめとする各種恒例イベントなどでも市民に馴染み深い場所です。

比べながら歩いてみよう

公園全体の形状に、競馬場のコースの名残（なごり）が。
実際に歩いて当時の様子を想像してみて。

出典：国土地理院撮影の空中写真

平成19年（2007）
緑の多い公園に整備。岸和田市総合体育館は南東の栄ノ池を半分ほど埋め立てて建設



昭和50年（1975）
1周1250mあったトラックや、障害競走のコース、観客用のスタンド席が見られる

B 公園南西側のゲートボール場のそばに、競馬場コースの形跡が林となって残る

A 競馬場コース北東側は周囲400mのトラックがある見晴らしのいいスポーツ広場に

岸和田市民フェスティバル

昭和53年（1978）5月、公園が誕生した年に第1回目が開催された市を代表するイベントです（➡P38）。

岸和田スケートパーク

令和4年（2022）1月に園内にオープンした公共のスケート場。宝くじの助成金の支援で整備。

岸和田の
いまむかし

府内トップの産出額

農業王国

豊かな自然に恵まれる岸和田市は、古くから農業が盛ん。現在では、農業産出額や耕地面積が大阪府内でトップレベルです。農業王国・岸和田の過去から未来への変遷を追います。

耕作の様子
かつては荷を引かせるなど、農業に牛が利用されていた

久米田池が基盤となった岸和田の農業

岸和田市域では、紀元前2世紀頃から低湿地を中心に稲作が行われていました。やがて、周辺エリアにも稲作が広まりますが、八木郷には大きな川がなく、干ばつや水不足が課題に。それを解決したのが、ため池・久米田池で、完成以降一帯の田畑を潤し、農業の支えとなりました。その後、津田川・牛滝川・春木川に堰が作られ、水路やため池が整備されていきました。

江戸時代、米は大半を年貢として納めなければならず、糸や布にして売るための綿や、砂糖の原料となる甘蔗（サトウキビ）も盛んに栽培されました。また、藩主が栽培を奨励したミカンは、明治以降品種改良が進み、収穫量が増加。さらに、タマネギをはじめ、桃や花卉、チーゼルなどの栽培も定着しました。

昭和に入ると特産のミカンとタマネギはさらに生産量がアップ。さらに、トマトやダイコン、サトイモ、ショウガ、イチゴなど、生産される農作物の種類は多様になりました。

葉物野菜の栽培の様子（令和4年（2022））
ビニールハウスで、夏場はホウレンソウ、小松菜、冬場は春菊（きくな）などを通年で栽培する

チーゼル選別の様子（昭和34年（1959））
鉤爪（かぎづめ）のようなトゲが無数にある果穂（かすい）を乾燥させ、毛織物を起毛させるのに用いた

泉州たまねぎの祖・坂口平三郎ヒストリー

平三郎は文久元年（1861）、土生新田（現 土生町）の農家に生まれます。明治12年（1879）、神戸の西洋料理店でタマネギを食べたことをきっかけに、アメリカ人から分けてもらったタマネギ3個で栽培実験を開始。苦心の末にタマネギの採種・栽培に成功します。種子を無料で配布するなど、平三郎が栽培を奨励したことで、タマネギは泉州の特産品として定着したのです。

生涯をタマネギ栽培の実験に費（つい）やした平三郎

土生町に立つ顕彰碑（けんしょうひ）が平三郎の偉業を伝える

収穫後、保存するためのタマネギ小屋が点在するのはおなじみの農村風景だった

大阪府内最大の農業用ため池・久米田池

満水面積は府内第1位の45.6ヘクタール、貯水量157万t、周囲延長2650mもの農業用ため池。約1300年近く前に築かれて以来、改修・整備を繰り返し、現在も農業用水として田畑を潤しています。平成27年（2015）には、世界かんがい施設遺産に（➡P9）。

昭和17年（1942）
当時は、現在のような桜並木は確認できず、殺風景な印象

令和4年（2022）
現在のような大きな池になったのは、江戸時代以降と考えられている。今は桜の名所に

大阪府屈指の農業王国は丘陵地区を中心に発展中

現在は、都市近郊農業によって府内きっての農業王国となった岸和田市。大阪市に近い立地と、発達した交通網を生かし、鮮度の高いまま大消費地に農作物を届けられるのが強みです。

そして、今後の農業基盤強化のため整備を進めているのが、丘陵地区・ゆめみヶ丘岸和田（➡P52）の農エリア。〝都市・農・自然が融合したまち〟をめざすゆめみヶ丘岸和田では、約36ヘクタールを農エリアとし、農地の整備・売却を進め、営農規模の拡大を図っています。近くにある「道の駅 愛彩ランド」の農産物直売所は、安全・安心な食材や加工品が並ぶ地産地消の拠点として、すでにおなじみ。愛彩ランド出荷協力会の岡本冠一会長によると、愛彩ランドでは少量でも販売ができるため、新規出荷者も増えたそう。農エリアでは、消費者と直結する愛彩ランドや、JA営農センターなどと連携しながら、新規就農者を増やす取組み、先端技術を用いた施設園芸の展開など、次の世代へ向け、地域農業のさらなる活性化をめざしています。

整備された農業用地には、今後農作物が栽培される予定

農業産出額（畜産を除く）が大阪府内でNo.1に！

岸和田市の耕種（農作物）農業は、農業産出額が大阪府で1位！これは、過去から受け継いだ栽培技術で、すぐれた農産物を産出し続けた結果です。産出額の約60％は野菜が占め、果物や米、花卉などが続きます。

季節ごとに多種多様な農作物が生産されている

道の駅 愛彩ランド

農産物直売所もある！

愛彩ランドができて農家のやりがいや笑顔が増えたと話す岡本会長

農家が育てた季節の農作物や加工食品、漁協から直送の魚介などがズラリと並ぶ直売所のある道の駅。レストランでは、とれたての食材を使った料理をバイキングで楽しめるランチが評判です。食と農に関する体験ができる体験交流館もあり、岸和田市内外の人々の交流拠点になっています。

出荷者は1000人以上。商品には出荷者名が記され、価格は出荷者が設定する

レストランでは旬の野菜を中心に、魚介なども地元の食材を使用

人気のランチバイキングでは約70種の料理が並ぶ

都市・農・自然が融合したまち
ゆめみヶ丘 岸和田

スマート農業

岸和田市と株式会社クボタが連携し、スマート農業を推進中です。農エリア内にビニールハウスを建設し、施設園芸製品の研究開発や試験を行うほか、農業生産者のハウスに、温度や湿度などの栽培環境データを収集する機械を設置。データを生産者らに還元することで、収穫量や品質が安定した施設栽培の確立に繋げます。

農福連携

農と福祉の連携をめざしており、障害のある人を雇用する農業法人が事業を行うことが決まっています。農業が障害のある人の仕事となり、いきがいの創出や経済的な自立を支援していきます。

上／ため池も整備。ここから貯留施設・ファームポンドへ水を汲み上げる

右／幅約7.2mと広々した農業集落道路も整備

左／ファームポンドからパイプラインで、各農地へ給水する仕組みに

Check

農産物を生かした商品で地域活性化をめざす

岸和田市立産業高校【商品開発クラブ】

地域と連携し、商品開発や販売実習、PR活動を展開する、産業高校の商品開発クラブ。2020～21年には、大阪府、カゴメ、ロート製薬と協力し、岸和田産春菊（きくな）を使った飲食店メニューの開発を行いました。開発したメニューは、グランフロント大阪内のレストランにて提供され、春菊（きくな）の認知度向上、消費拡大の機運を盛り上げました。

ロート製薬直営のレストランにて1カ月にわたり提供された

圃場（ほじょう）見学にも出向き、春菊（きくな）についてもしっかり学習

部内や関係者とのミーティング・実習を重ねてメニューを考案

府内トップの産出額

農業王国

岸和田名産の

フルーツ&ベジタブル

生産地と消費地との近さを生かした都市農業を展開する、岸和田市ならではのフレッシュな農作物の魅力に迫ります。

室町時代に渡来。江戸時代には大阪など各地での栽培記録が残るそう

軟らかく風味豊かな最強“軟弱野菜”

春菊(きくな) 9~4月

令和元年(2019)から2年連続で、全国1位の春菊生産地となった大阪府。府内最大の産地は、岸和田市などの泉州地域で、大阪では“きくな”とも呼ばれています。傷(いた)みの早い軟弱野菜ですが、栽培されるのは株が横に這う「株張り型」のため、根から引き抜いて鮮度を保つことが可能。新鮮でさわやかな味は、鍋やおひたし、おでんなど関西の食文化に欠かせない葉物野菜として愛されています。アクが少ないので、サラダなど生食もお試しあれ。

種蒔(まき)き前に稲わらを漉(す)き込んでしっかりと土作りするのが大事。暑さに弱いので遮光やハウスの換気などに特に気を付けています。一年中出荷されますが、やっぱり旬の寒い時期がうまいですよ。

野口勝巨(まさなお)さん

完熟した果実は、栄養たっぷりで絶品!

イチジク 8月~10月上旬

岸和田市をはじめとした泉州や南河内で盛んに栽培される、都市近郊の果物の代表格。早朝に収穫すると翌日には販売されるので、完熟の果実が新鮮なまま届くと消費者に好評です。大阪では明治以前から栽培され、水田の転作などで生産量を増やしました。食物繊維や鉄分なども豊富で、女性人気も高いイチジク。漢字で書くと“無花果”ですが、実は私たちがおいしくいただいている果実の中の部分が花なんです。そのままはもちろん、ジャムやワイン煮、サラダなどでもぜひ。

上田和義さん

暑すぎると実の数が少なくなるなど、気候に左右されやすい果物ですが、完全に熟したイチジクの味わいは格別。全体的に黒っぽい色の物を選ぶとよいですよ。

若すぎず、熟しすぎず、タイミングよく収穫するのが難しい

タマネギ栽培歴は子どものころから。「やっぱり泉州たまねぎに限る」って言ってもらえるのがうれしいですね。生で味わって、素材のよさを堪能してください。

近道(こんどう)泰光さん

葉が倒れてから1週間ほどが収穫時だそう

生でも火を通しても万能!

泉州たまねぎ 4~6月

たっぷりの水分と甘みが魅力の泉州たまねぎ。明治時代に、岸和田で採種・栽培が成功し、その後、稲作の裏作として作付面積を拡大。昭和37年(1962)には606ヘクタールもの土地で栽培され、岸和田のみならず泉州の特産品となりました。現在は当時より生産量は減っているものの、ブランド力の高さは健在。砂地ではなく、土で栽培することでよく締まった実に育つのだそうです。肉厚で軟らかく濃厚な味で、長年愛されています。

春に満開になった桃の花。大きく実らせるため、よい花を残して摘み取る

濃厚な甘みと芳醇な香りがたまらない!

包近(かねちか)の桃 6月中旬~7月

岸和田市の桃の生産量は大阪府随一。なかでも、栽培の歴史が150年以上あり、「桃と赤鬼」という昔話も伝わる包近地区の桃は、「包近の桃」ブランドとして、近年人気がうなぎ上りです。人気の秘密は糖度の高さ。大阪市という大消費地が近く、樹上でギリギリまで甘さを蓄えられるので、通常でも10~12度、さらにそれを超えるような糖度の果実が出荷できるのです。冬場に肥料を与えて剪定(せんてい)、春には摘蕾(てきらい)・摘果(てきか)の作業を経て、最終的に実る桃は1枚に1個以下。ひとつずつ丁寧にかけられた袋の中で美しく育つ果実は、ジューシーでスイートなとっておきです。

池田 孝さん

害虫・害獣や病気の対策も必要ですが、農薬などの使用は最小限に留め、一年中手塩にかけて、安全・安心でおいしい桃を育てています。

“世界一甘い桃”が包近に!

包近の桃農家・松本さんの育てた桃が、糖度の高さで平成27年(2015)にギネス世界記録™に認定。バクタモンという土壌改良微生物資材を取り入れる栽培法を長年にわたり研究した成果で、その糖度は、果実全体の平均値がなんと22.2度を記録しました。「世界一甘い桃」として、包近の桃人気を後押ししています。

ギネスになかった「食物の糖度」というカテゴリを生み出しました!

松本隆弘さん

若手農家で組織される岸和田4Hクラブなどで情報交換をしながら、冬季にこだわり、生産されている

冬ニンジンは一般的に糖度8度でも甘い方ですが、私の栽培する彩誉®は糖度10度以上になります。甘みが強いので、生で食べるのもおすすめですよ。

南 孝信さん

みずみずしさ抜群! 泉州でしかとれない極上ナス

泉州水なす 3~11月

岸和田市の特産としてまず名の挙がる泉州水なすは、泉州特有の品種。室町時代には栽培されていたようで、ほかの地域で育てると品質が変わるというほど、泉州の気候や食生活と深く結びついています。柔らかな果皮は輸送が難しく、かつては地元でのみ消費されていましたが、約30~40年前ごろから品種改良が進み、1990年代にはなにわ特産品に選定されるなど、生産者も行政も需要拡大策に着手。輸送技術も発達し、全国で消費されるようになっていきました。皮が薄く、実の約92%は水分。アクが少なく、糠漬(ぬかづ)けはもちろん生でも美味。ひと口でトリコにしてしまう味のよさで需要と知名度は拡大中です!

水やりが少しでも多いと実らなかったり、葉が触れただけで実に傷ができたり、とにかくデリケート。枝の剪定(せんてい)や葉かきなど、とても手がかかりますが、おいしく育てる努力は惜しみません!

上坂孝博 さん

水はけをよくするため高く盛られたうねに苗が美しく並ぶ

岸和田の いまむかし

府内No.1の漁獲量！

岸和田の漁業がすごい！

大阪湾は古くから好漁場で、なかでも岸和田市は大阪府内でトップの漁獲量を誇ります。ここでは岸和田市の漁業のすごさとともに、未来を見据えた取組みもお伝えします。

地びき網漁の様子（昭和20年代）

網船が網を仕掛け、浜辺から大人数で引き寄せる。砂浜が埋め立てられ、岸和田では昭和40年頃に消滅した漁法

打瀬網漁の漁船

複数の網を海底に沈め、帆を立て風力で引っ張る。江戸初期～昭和初期の漁法と伝わり、泉州地域でも盛んであった

小魚を肥料にするほど魚がとれた好漁場

大阪が「なにわ」と呼ばれるのも、「魚庭（魚の豊かな庭）」が由来という説もあるほど、大阪湾は瀬戸内海でも有数の好漁場。複数の河川により山から運ばれてくる栄養分が魚を育て、春先になると紀州沖からイワシ類の仔魚（シラス）が北上。さらにそれらを餌にする魚たちが無数に集まります。岸和田の漁は歴史が古く、弥生時代には漁が行われ、江戸末期には130隻以上の漁船があったと伝えられています。また、堺から泉南まで続いていた砂浜には、昭和30年頃までイワシ類がびっしり干され、同時代に盛んであった綿花栽培の肥料「干鰯」になるほどでした。

競争で魚の品質が向上！革命的なシステムを実現

現在、岸和田には、大船団でイワシ類やイワシシラスなどの大群の漁獲を行う大阪府鰮巾着網漁協と、複数の漁法で多種類の魚介を漁獲する春木漁協、岸和田市漁協の計3つの漁業協同組合があります。

平成26年（2014）、鰮巾着網漁協が大阪の漁師がとったイワシシラスとイカナゴの水揚げ場所を一つにまとめ、そこにセリを行う入札場を開設しました。それまで漁師と加工業者が個別に交渉して取引きされていましたが、セリによって競争が生まれ、それぞれが水や氷を変えるなど工夫を凝らし始めたことで魚の品質が向上、売上げは3割増に。漁師の給料もアップしてより魅力的な職業になったためか、現在鰮巾着網漁協では20～30代の漁師が全体の4割を占めるそうです。

お正月に大漁旗を掲げ船出する、巾着網漁の漁船

左・上／イワシ類やアジなどをとる巾着網漁法。魚の群れを長さ約1kmの網で囲み、すそを巾着のように絞る。5隻の船で行う、規模が大きな漁法

写真提供（上）：大阪府

上／イワシシラスやイカナゴは船びき網の網船から小型の運搬船に移し替え、入札場へ　下／到着5分後にはセリが終わるというスピーディーさで鮮度を守る

※資料「平成30年農林水産関係市町村別統計」より

3漁協の課題は、大阪湾の魚の価値をもっと高めること。よく太ったマイワシが「金太郎鰯」と呼ばれ、高値がつくように、魚のブランド化も進んでいます。また、朝どれの魚を関西国際空港から空輸し、夕方には東京や名古屋などの飲食店で出すことも可能。他都市へのアピールとともに、府民に大阪湾の魚を知ってもらう取組みも始められています。

次世代を見据え、〝育てる漁業〟を開始

よい漁場の近くには、海に栄養源を流す広葉樹の森がある、といわれています。大阪府では未来へ向けた取組みとして、府内24漁協の若手漁業者が集い、植林や間伐、下草刈り、竹林伐採などを行う「魚庭の森づくり活動」を20年前から開始。現在も年に数回、おもに神於山地区で活動しています。ほかにもプラスチックなどの海底ごみを拾って海を美しくする活動も行われるなど、漁獲量が減ったといわれる大阪湾を再び豊かな海に戻すために、有志によって地道な活動が続けられています。

急斜面の山に分け入って下草を刈る漁師たち

Check 開かれた漁港をめざして

大阪府鰮巾着網漁協では「大阪湾の魚をもっと知ってほしい」と、地蔵浜地区に食事処を常設しているほか、いろいろなイベントも開催しています。

泉州海鮮きんちゃく家

目の前の漁港で水揚げされたイワシシラスのほか、新鮮な海鮮が格安に味わえる通年営業の食事処

地蔵浜みなとマルシェ

毎週日曜に開催。朝どれの魚や泉州の特産品が買えるほか、BBQコーナー、ステージイベントなども

大漁！親子まつり

年に1回、毎年10月に開催。マイワシのふるまいやセリの模擬体験、漁業見学クルージングなどが人気

スズキ 7～9月
呼び名：25㎝前後セイゴ　30～40㎝前後ハネ　60㎝～スズキ

成長につれて呼び名が変わる、縁起のよい出世魚。上品かつ淡白な味わいで人気が高い

マイワシ 6～10月
呼び名：イワシ　ヒラゴ（小型）

丸々太ったものは「金太郎鰯」と呼ばれ、2019年G20大阪サミットの夕食会でも提供された

マダコ 6～10月
呼び名：タコ

泉州沖でとれ、府内で加工した茹でダコを「泉だこ®」としてブランド化

イワシシラス 4～11月
呼び名：18～35㎜シラス　35～45㎜カエリ

2014年に水揚げが1カ所に集約され、品質が劇的に向上！

イカナゴ 2月下旬～3月上旬
呼び名：30～50㎜シンコ（新子）　成魚フルセ、カマスゴ

漁の解禁は、春の訪れを告げる風物詩。佃煮の「釘煮（くぎに）」でも知られる

東京で高値がつく魚も多数！

岸和田 自慢の魚介たち

さまざまな漁が行われ、水揚げされる魚も実に種類豊富！その一部をご紹介します。

キジハタ 7～8月
呼び名：アコウ

大阪湾の魚の中でも大型で、全長1m以上にも。帯状の網を海中に吊るす、流し網漁でとられる

アカガイ 12～3月

夏の高級魚で、全長35㎝以上など基準を満たすものを「魚庭（なにわ）あこう」と名付け、ブランド化

サワラ 9～11月
呼び名：2kg未満サゴシ　2kg以上サワラ

マアナゴ 5～7月
呼び名：アナゴ

1本まるごと天ぷらにし、醤油と青ネギで食べるのが泉州流

味がよく高値で取引きされるアカシタのほか、アオシタ、パケシタなど種類豊富

シタビラメ類 12～5月
呼び名：アカシタ（和名：イヌノシタ）など

キチヌ 6～8月
呼び名：キビレ

クロダイに似ているが、背ビレ以外のヒレが黄色で、名の由来にも。クロダイと同様、刺身や塩焼きで食べられる

大阪湾は別名「茅渟（ちぬ）の海」ともいわれるほど、鯛の仲間クロダイ・キチヌが豊富にとれた

クロダイ 10～3月
呼び名：チヌ

岸和田の いまむかし

岸和田近代化物語

大阪の産業の発展をリードした 煉瓦・紡績・鉄工・ガラスレンズなどの分野で 岸和田市の産業。

煉瓦産業に始まり、紡績・鉄工・ガラスレンズなどの分野で発展を遂げてきた岸和田市の産業。その歴史と、今も世界に誇る技術力をご紹介します。

煉瓦・紡績が牽引した岸和田の近代化産業

明治時代、岸和田の主要産業の一つが煉瓦産業でした。岸和田の粘土が煉瓦の製造に適していると知った元岸和田藩士の山岡尹方は、廃藩置県で職を失った武士たちへの授産事業として、明治5年(1872)に煉瓦製造事業を開始。その後、一時経営は不振となりますが、岸和田きっての実業家・寺田甚与茂(⬇P13)らが手を差しのべ、明治20年(1887)に第一煉瓦製造会社を設立。明治26年(1893)に岸和田煉瓦株式会社へ改称し、のちに"岸煉(キシレン)"の名で親しまれるようになります。急激な日本の西洋化とともに煉瓦の需要は高まり、岸和田にはほかにも大阪窯業の工場などが立ち並び、煉瓦の一大産地となりました。

岸煉製の煉瓦はさまざまな建造物での使用が確認されており、旧山口県庁舎および県会議事堂や、同志社女子大学ジェームズ館など、今も日本各地に残っています。

そして、煉瓦産業と並んで岸和田を代表した近代産業が紡績産業です。明治27年(1894)、寺田甚与茂は、最新の紡織の機械技術と大量の綿花を輸入し、岸和田紡績株式会社を設立。日本有数の大企業に成長させました。

岸和田の煉瓦・紡績産業の発展は大阪全体の近代化を支え、泉州を含む大阪湾沿岸部の一大工業地帯は、産業革命で世界の綿工業の中心となったイギリスの都市にたとえられ「東洋のマンチェスター」と呼ばれるようになりました。

昭和16年(1941)、太平洋戦争が開戦。岸和田ゆかりの企業が軍需産業への転換を余儀なくされます。岸和田紡績も、政府の国防強化策のなかで大日本紡績に吸収合併されました。終戦を迎えると、GHQによる財閥解体が行われ、軍需産業は急速に衰退。民需産業が少しずつ再生し始めるなか、岸和田では昭和23年(1948)に、中小企業が力を合わせて「岸和田商工会議所」を発足し、繊維業と貿易の振興に力を尽くしました。

昭和30年代に入ると日本は高度成長期を迎えます。東京オリンピックの開催や大阪万国博覧会開催に向けた、道路の整備やビルの建設などの多くの需要に応えるため、岸和田でも沿岸部の埋立地造成が始まり工業地帯が拡大していきました。昭和41年(1966)には、臨海町に金属加工業者が40社以上集結する、敷地約10万坪の大阪鉄工金属団地が作られ、同年に東洋一の木材工業集積地をめざした巨大な木材コンビナートも完成。日本の高度成長を支えました。

岸和田煉瓦製のレンガの多くに「×(クロス)」の印があるのは、創業者の山岡がキリスト教信者だったからともいわれる。岸和田市内にもモニュメントとして保存されたレンガ塀が残る

明治期に発展を遂げた岸和田紡績の本社屋。昭和16年(1941)大日本紡績株式会社(日紡、のちのユニチカ)に吸収合併された

写真提供：ユニチカ株式会社

上／大正13年(1924)刊行『岸和田要鑑』に掲載された岸和田煉瓦の全景。当時5基の窯と、土を運ぶ蒸気機関車のトロッコがあった
左／煉瓦を焼成(しょうせい)していたホフマン窯

先端技術の数々！ 岸和田が誇る世界ブランド

顕微鏡用グラス

松浪硝子(まつなみがらす)工業株式会社・八阪町

明治37年(1904)、国内初の「カバー・スライドグラス」を製造。現在もその販売シェアは国内約65％を占める。ほかにも同社では光電子精密ガラスなど多様な精密加工ガラスを製造し、グローバルに展開。

海外用スライドグラス

同社のカバー・スライドグラスを使用した明治時代に造られた顕微鏡

FILCOT®(フィルコット)

織物

辰巳織布(たつみしょくふ)株式会社・上松町

繊維産業が盛んな岸和田で、同社が開発したのが経糸の長短複合織物「FILCOT®」。ふくらみやドライ感を持ちながら、フィット性やしなやかさを兼ね備えた織物で、世界の一流ブランドにもその品質が認められている。

鏡板

株式会社北海(ほっかい)鉄工所・臨海町

「鏡板」とは鏡餅の形状に似た鉄の特殊形状部材で、発電所・宇宙ロケットなど多様な分野の圧力容器関連機器に欠かせない必需品。昭和36年(1961)に、当時世界に類のなかった鏡板製造装置を北海鉄工所が開発し、現在もそのパイオニアとして活躍している。

鏡板の製造工場

未来へ繋ぐ産業地帯の整備へ

昭和後期から平成にかけては、バブル崩壊やアジア諸国からの輸入品増加などの影響を受けて全国的に景気が低迷。岸和田市からも大企業が次々と撤退していくなど、経済の成長・拡大路線は一旦歯止めがかかります。しかし近年は、企業の誘致などを図る沿岸部埋立地の「阪南2区(ちきりアイランド)」と、丘陵エリアの「ゆめみヶ丘岸和田(⬇P52)」の開発、「木材港地区 貯木場利活用ビジョン」(⬇下記)など、岸和田市の産業を再び活性化させるための、数々の産業振興ゾーンの整備が進められています。これらは、未来へのまちづくり推進プロジェクトの一環でもあり、快適に働ける施設とインフラの整備、環境への配慮などさまざまな目的を持った事業として期待が寄せられています。

阪神淡路大震災復興のシンボルとして、神戸市長田区に建てられた巨大な鉄人28号モニュメントも北海鉄工所が手掛けた

産業の発展とともに変貌するベイエリア

出典：国土地理院撮影の空中写真

ベイエリア開発が、未来の産業を育む

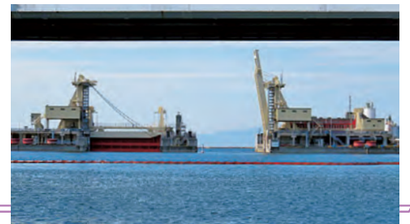
木材港地区 貯木場利活用ビジョン

「東洋一の木材工業集積地」をめざして昭和41年(1966)に完成した木材コンビナート。総面積200ヘクタールを超え最盛期には多くの合板工場が並び、貯木場には南洋材の丸太がびっしりと浮かんでいました。しかし昭和50年代以降から徐々に利用率が低下。そこで、この土地を「日本の未来をリードする先端産業創造空間」とすることをめざし、関係機関と協議しています。

岸和田市と忠岡町にまたがって立地する木材コンビナート。将来の発展に向け、令和3年(2021)利活用検討会が立ち上げられた

写真提供：株式会社北海鉄工所

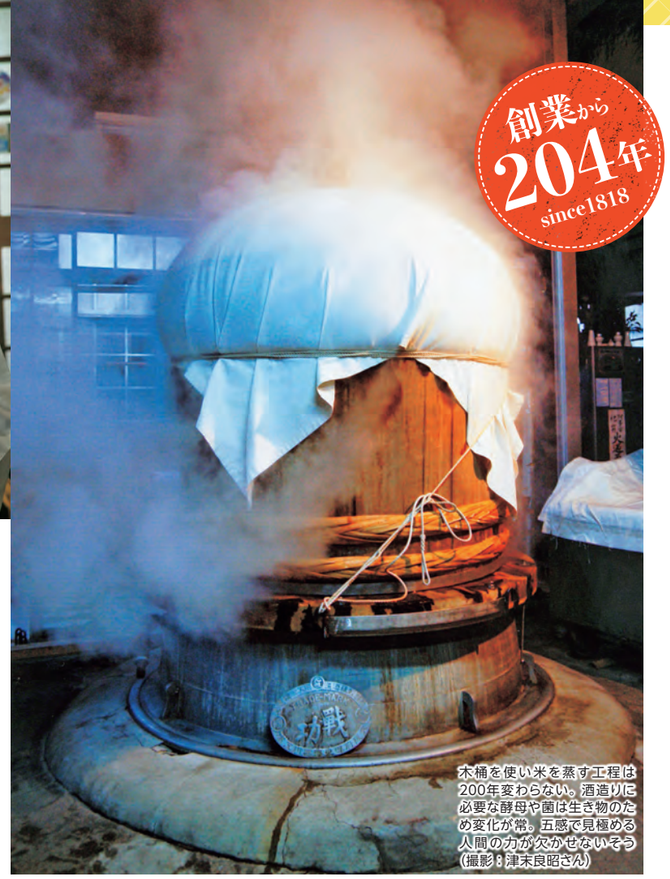
右／昭和45年(1970)頃の鉄工所の様子
下／昭和63年(1988)に、臨海埋立地への水害を最小限にとどめるため建設された「岸和田水門」



井坂酒造場 P30
株式会社 田中家具製作所 P30

岸和田で創業から100年以上。この店、あの会社

創業から100年以上を経た今も、岸和田で活躍し続ける人々の暮らしに寄り添うものを提供し続けるお店や企業があります。それぞれの代表に、昔から代々受け継ぎ大切にしていることや岸和田で店を構え続ける思いについて伺いました。



木桶を使い米を蒸す工程は200年変わらない。酒造りに必要な酵母や菌は生き物のため変化が常。五感で見極める人間の力が欠かせないそう（撮影：津末良昭さん）

井坂酒造場〈稲葉町〉

十代目蔵主　井坂佳嗣さん

創業は江戸時代の文政元年（1818）なので、200年以上、技術と体力が必要な「寒造り」という昔ながらの製法での醸造を続けています。昔、岸和田は米がよくとれて、その米を使った酒造りが盛んでした。平成の中頃までは毎年秋になると、兵庫県の但馬などから杜氏（＝酒造りの職人）の皆さんが集団で岸和田を訪れて春まで住み込みで酒造りを行っていたんです。しかし、高齢化や継承者問題などから、その形は消え、岸和田に多数あった酒蔵が閉蔵してしまいました。うちでは息子や地元の若者たちが、伝統を絶やしたくないという思いや酒造りの技を継承してくれたので、とてもありがたく思っています。

岸和田の地酒は希少です。ぜひ進物用にも使っていただきたいですし、何よりこれからも、地元の方々に大切な日に楽しく飲んでほしいです。

地元の人々にずっと愛される岸和田の地酒を造り続けたい。

井坂さんは平成29年（2017）に黄綬褒章を受章。奈良県にある「三輪明神」への毎月1日の参拝を欠かさないそう。岸和田のお気に入りは「酒蔵から眺める山々の風景」だとか

全国新酒鑑評会で金賞受賞歴を持つ

逸品 PICK UP

純米大吟醸
三輪福 米の華

ほぼ地元で消費される希少な岸和田の地酒として人気。「三輪福」の名は、酒造りの神様を祭る「三輪明神」から特別に使用を許されたそう。山田錦を50％精米して使用していて、豊かなコクと軽い甘さ、フルーティーな香りがあり、余韻を楽しめる。

岸和田にちなんだ「だんじり」や、「六甲おろし」などの銘柄も揃う。昔、岸和田の酒は氏神様に供えたあと、残った分を地元で楽しむものだった

株式会社 田中家具製作所〈荒木町〉

三代目 代表取締役社長　田中由紀彦さん

当社は岸和田で大正8年（1919）に創業し、以降100年間、材木選び、製材法、組み手加工、蝶番の両掘り、密閉度、強度、精巧な美しさなどにこだわる桐箪笥作りを続けてきました。現在も伝統工芸士5名が所属し製造に従事しています。

日本で最初に桐の箪笥が広まったのは江戸時代中・後期の大阪といわれています。着物を大切に保管できる収納具として重宝され、婚礼家具の代表格になり、より上等の桐箪笥が求められるようになって、この大阪泉州には一大産地が形成されました。今もその品質は全国に知られ、「大阪泉州桐箪笥」は伝統工芸品として国に認定されています。

私は「岸和田といえば桐の箪笥」という文化を守りたい。桐の箪笥は、汚れたり傷んでも伝統の手法で「洗い替え（＝修復）」すれば、新品同様に蘇って次世代にも受け継いでいただける家具です。SDGsがうたわれる昨今。モノを大切に使い続けることのすばらしさを伝え続けていきたいです。

昭和中頃、春木旭町にあった「田中家具製作所」の店頭風景

創業から103年 since1919

田中家具製作所は、その家具の美しさと技術で、皇室・高円宮家の婚礼家具の桐箪笥の制作も担当。岸和田市のふるさと納税の返礼品としても多彩な品々を出品している

桐の中のアクを抜くため、雨にあてては乾かす「自然乾燥」を徹底し2〜3年の時間をかける。銀灰色の木肌になるとアクが抜けたサイン。大正時代から変わらぬ大変な労力と時間が必要な工程

逸品 PICK UP

初音の家具
大阪泉州総桐箪笥

最高級の桐材を使用した岸和田を代表する伝統工芸家具。組み手の数が多く、堅牢な作りと繊細な美しさを併せ持ち、密閉性、耐火性、調湿性、防カビ・防虫性に大変すぐれている。写真は右戸から左戸へと螺鈿（らでん）や蒔絵（まきえ）が連なる同社自慢の逸品。

田中社長は、市制施行90周年の際に岸和田市で行われた「NHKのど自慢」にも出場。おもに販売や広報を担当し、弟の専務・田中美志樹（よしき）さんが製造現場をまとめている

御菓子司 小山梅花堂 P32
株式会社 留河 P32
南宗味噌株式会社 P33
御菓子司 岸和田風月堂 P33

岸和田のいまむかし

岸和田で創業から100年以上。この店、あの会社

昭和中頃の小山梅花堂。創業時から現在まで変わらず岸和田城にほど近い紀州街道沿いに店を構える

御菓子司 小山梅花堂〈本町〉

創業から183年 since1839

岸和田城主が愛した御菓子の味を楽しんでほしいです。

岸和田市民の「御用達」ともいえる老舗を支える七代目店主の職人・小山啓一さんとお姉様の渋谷幸子さん。おふたりとも桜の季節の岸和田城が大好きだそう

❖渋谷幸子さん

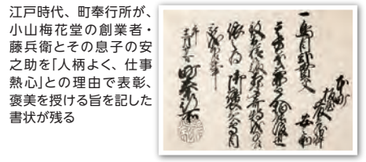
当店は天保10年（1839）に今と同じ岸和田城近くで創業し、岸和田岡部藩の御用菓子司を務めました。初代の名が板屋藤兵衛だったので、今も名残で「板藤さん」と呼んでくださる方もいます。現在、小山啓一が七代目です。お茶席へのお届けなど、古くからの常連様も多く、岸和田城へ上納していた頃と変わらぬ味と、季節に応じた新しいお菓子の提供に精進する日々です。

実は平成に入って、火災で工房と店の一部が焼失し、閉店を考えたことがありました。でも、工房を貸してくださるなど、とても多くの方々に温かく支えていただき、長い道のりでしたが店と工房を再建することができたんです。皆様への感謝の思いを、この先も御菓子に込めていきたいです。

逸品 PICK UP

梅花むらさめ

岸和田銘菓。小豆・米粉・砂糖を合わせ裏ごし、そぼろにして蒸し上げた棹（さお）菓子。岸和田城主に献上していた頃と変わらない、もちっとした食感と控えめな甘さが特長。



江戸時代、町奉行所が、小山梅花堂の創業者・藤兵衛とその息子の安之助を「人柄よく、仕事熱心」との理由で表彰、褒美を授ける旨を記した書状が残る

株式会社 留河〈大町〉

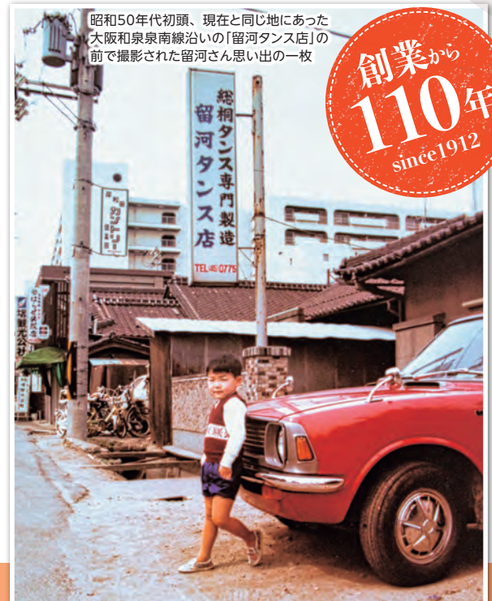
❖四代目 代表取締役社長 留河 昇さん

大正元年（1912）に創業し、二代目留河栄が勲六等瑞宝章を受章するなど、岸和田の桐箪笥店の老舗として数々の栄誉にあずかりました。しかし、私が代表になった頃、桐箪笥の市況は大変厳しくなっており、長年培ってきた技術と知識を生かして、時代に即した新しい事業展開はできないかと模索し続けたんです。そして長い企画期間を経て、桐の調湿・防虫性などの特性を生かした「桐製米びつ」や、新素材「桐和紙」「桐糸」を開発しました。さらに近年は、企業や小学校などへの桐の植林活動にも着手しました。桐は二酸化炭素を多く吸収し、成長が早く育つ姿を楽しめます。多くの方々が桐に親しみ、岸和田の桐製品を見直すきっかけになってくれればうれしいです。

逸品 PICK UP

泉州留河桐製米びつ

泉州桐箪笥を作ってきた伝統工芸士が作る桐製米びつ。桐以外の素材を使わず、お米一合分を簡単に計量できる独自設計。気密性、防虫効果、調湿機能を持ち、お米のおいしさを守ってくれる。



昭和50年代初頭、現在と同じ地にあった大阪和泉泉南線沿いの「留河タンス店」の前で撮影された留河さん思い出の一枚

創業から110年 since1912

「桐」の持つすばらしい特性を岸和田から世に広めたいです。

幼少期から岸和田で桐に囲まれて過ごした留河さん。開発した「桐糸」で高い吸水性・通気性を持つ帽子・Tシャツなども展開。独自の発想力で多くの業界と連携を図る

桐の端材をパウダー状にして和紙に練り込んだ「桐和紙」や「防虫調湿シート」を開発。その後約9年の期間をかけ「桐糸」へ展開

南宗味噌株式会社〈今木町〉

❖五代目 代表取締役 南 敦子さん

初代南宗七が、慶応3年（1867）に岸和田の筋海町で糀の製造所として創業し、今も伝統の「もろ蓋製法」で糀を製造しています。店内には糀・大豆・天然塩を原料とする、昔ながらの素朴な味の味噌・塩糀・醤油糀や、夏季限定の泉州名物水なす漬など〝心と体が喜ぶ発酵食品〟を多く取り揃えています。

私は岸和田で生まれ育ったので、〝大好きな地元の味を広めたい〟という思いで、「手造り味噌キット」を販売したり「味噌造り体験」を開催しています。また、お味噌・糀・地元食材を使った料理を提供するカフェも併設しました。昔から「なんそうさん」と親しみを込めて呼んでいただいているので、そのまま店名は「なんそうさんのCafe」に。これからも伝統の味を守り、皆様に伝えていきたいです。

味の決め手となる糀。米一粒一粒に美しい"米の花"が咲くよう"もろ蓋（ぶた）"という木製の箱を使ったもろ蓋製法で愛情込めて仕上げている

糀・天然塩・大豆も個別に購入可能。自宅で楽しむ「手造り味噌キット」も揃う

逸品 PICK UP

米糀赤味噌・特上白味噌

厳選した国産米、大豆、天然塩を素材に、昔ながらの製法にこだわった無添加の味噌。赤味噌は大豆のコクがしっかり。白味噌は泉州人好みの中甘口。

心を込めて伝統の味を伝えたい。

岸和田唯一の味噌処として

創業から155年 since1867

右から2番目が代表の南さん。インドネシア出身の夫が先代から技を引き継ぎ製造を担当。スタッフの皆さんとともに伝統の味を守っている

御菓子司 岸和田風月堂〈本町〉

温かみのある和菓子店でいたいです。

岸和田の方々の日常を彩る

創業から120年 since1902

25歳で店を継ぎ現在35歳の竹内さん。「受け継ぐ和菓子」と「まだ岸和田にない和菓子」を常に考え、SNSなどでの発信にも力を注ぐ

色とりどりの生菓子。季節に合わせて頻繁に内容が変わるそう

代々受け継がれている岸和田市の市章が彫られた生菓子作り用の木型

❖五代目店主 竹内健治さん

当店は明治35年（1902）に「竹内商店」として創業し、その後三代目店主が「東京風月堂」で修業してのれん分けを許され、岸和田に戻って昭和40年（1965）に「風月堂」として再スタートしました。昭和50年（1975）には、〝もっと岸和田の方々に愛していただけるように〟との思いから「岸和田」を加えて、現在の「岸和田風月堂」に屋号を改めたと聞いています。

和菓子店なのに、祖父（三代目）は、要望があれば近所の子どもたちにバースデーケーキを作ることもありました。私も同じように地元の方々との心の交流を大切にしたいです。伝統の味を守りつつ、お店に入るとワクワクしていただけるような、創作和菓子にも挑戦し続けていきます。

逸品 PICK UP

玉時雨・白玉時雨

ホロホロとほぐれる食感が雨のようと、岸和田城主が「時雨（しぐれ）」と命名したそう。岸和田では「むらさめ」という名でも呼ばれる菓子。

長年の岸和田市の産業振興への貢献が称えられ、平成24年（2012）岸和田市と岸和田商工会議所より表彰状が贈られた